

# 月刊 社会保険 2

2021 VOL.847

一般社団法人  
全国社会保険協会連合会

認知症とともに生きる  
家族の物語

●第10回●

## 認知症の祖母が残してくれた 「贈りもの」

NPO法人ハート・リング運動専務理事

早田 雅美

今回は、以前ハート・リング運動へいただいた手紙を、本人の了解を得て紹介します。

手紙をくださった北本裕香さん(仮名)は、当時神奈川県横浜市在住の短大生でした。現在は、県内の設計事務所勤めていて、母親と弟との3人暮らしということでした。

2年ほど前に、建築家だった父をがんで亡くしました。裕香さん自身は小さい頃から父親と同じ建築家志望で、大学もそうした学部を希望していたのですが、裕香さんが高校2年の夏頃から父親の病気が発覚し、それ以来、部活や勉強のかたわら、週に1〜2回父親の友人の司法書士事務所、事務補助のアルバイトをこなし、「いつも忙しい」生活だったということです。

建築を学ぶにはお金もかかるということで、第2志望だった短大に入学したということでした。

### 祖母の様子が変化していき

以下は、裕香さんからいただいた手紙の一部です。

「私は、今年短大に入学した学生です。5月に母方の祖母を亡くしました。私が親と住んでいる家と祖母の住んでいた家は電車とバスを乗り継いで1時間半ほどの距離にあります。私が中学生だった頃までは子ども好きだった祖父も存命でしたので、年に何度かは従姉妹などと祖母の家に集

まったりして比較的にぎやかに過ごしていました。が、祖母ひとりになってからは、なんとなく足が遠のいてしまっていました。去年の夏、叔母から祖母が認知症で、それかなり重いと電話をもらいました。それ以来部活の忙しい時期を除いて、高校の帰りに祖母の家をまわって帰ることが多くなりました。

独り暮らしとなった祖母の家の近くに叔母が住んでいて、ときどき祖母の様子を見にいつていたそうです。叔母の話は裕香さんにとって衝撃的でした。食事をした形跡はあるのに、「昨日からなにも食べていない」という。冷蔵庫を開けると、食品と一緒に下駄箱のようにサンダルと靴が押し込んである。雨の降った日のあとには、窓を閉め忘れたのか、吹き込んだ雨で家財がすっかり水をかぶってしっとりしてしまっている。

### 知らんぷりはできない

そんな話を聞いては、「知らんぷりできなかった……」そうです。祖母の長女にあたる裕香さんの母親は、パートで忙しく、なかなか自身が様子を見にく時間も取れない状態でした。裕香さんに対しては、部活やバイトで忙しいのだから、祖母の家まで訪ねる必要はない、叔母に任せておけばよい……そう話していたといいます。

年頭所感 厚生労働大臣 田村 憲久  
ごあいさつ 日本年金機構理事長 水島 藤一郎  
新年を迎えて 全国健康保険協会理事長 安藤 伸樹  
令和2年度 厚生労働省第3次補正予算(案)のポイント  
令和3年度 厚生労働省予算案のポイント  
全世代型社会保障改革の方針  
新子育て安心プラン  
介護報酬改定について

「きれい好きだった祖母の家は、入るなり散らかっていました。でも懐かしい祖父の写真が仏壇に飾られていて、その前にはかわいい造花が生けてありました」。

裕香さんはその後、忙しいスケジュールをぬって1時間半も遠まわりをして祖母の家をたびたび訪ねるようになったのでした。

「裕香だといってもきょとんとされることもあって、明らかに私を私の母と間違っているなと思うことも少なくありませんでした」。

### いろいろな異変

はじめはそのことがショックだったという裕香さんですが、認知症についてネットで情報を集めるうちに、祖母のいうことを「否定してもよいことではない」ことを学んだといっています。

「非衛生なこともたしかによくありました。いちばんショックだったのはクローゼットの中からの異臭に気づいて扉をあけてみると汚物が包んで置いてあったこと、叔母の様子からはそうしたことも1度や2度ではなかったようです」。

そんな祖母の様子から叔母は市の地域包括支援センターに入所できる施設を至急探してくれるように頼んでしまいましたが、「いつ空くかわからない」というのが市の回答でした。ある程度の金銭的な負担ができるのであれば、入れる施設もなくはない

ということだったものの、家族は決めかねていました。

裕香さんは叔母と一緒に、祖母の家から一番近い特別養護老人ホームを見学に行ったことがあったそうです。

「2年ほど前にできたばかりのきれいな施設でした。認知症の人が多いという説明でしたが、ちょうどホールではレクリエーションの時間でした。若い職員が昭和の歌のCDをかけて、陣に丸く並んだ入所者の皆さんに音楽にあわせて、からだを動かすことを勧めていました。でも盛り上がりそうとしているのは職員だけという感じ、半分くらいの人が車いすでウトウトと、残りの人も決して楽しそうとはいえない表情を見ると、介護の大変さどこかこころが締めつけられるような気分になってしまいました」。

### 祖母の宝もの

しかし、この放課後の祖母との対話の時間の中で裕香さんはいくつもの発見をすることになった。

「私はいくつもの発見をすることになりました。ある日(その日は祖母の体調もよかった感じ)、祖母が『宝もの』だと見せてくれたものは、なんと私の母が子ども時代に描いた下手なクレヨンのお顔の似顔絵や夏休みの作文や子ども時代の母と叔母

のか、驚きとともに尊敬という言葉しか思いあたりませんでした」。

### 祖母が残してくれたもの

「一番心配したのは、訪ねてみると家には誰もいなくて、警察にも連絡して叔母と手分けして祖母を探しまわった日のことでした。その日、祖母はひとりで散歩に出たものの、帰り道がわからなくなってしまうようでした。本屋さんの角で動けなくなっているところを発見、思わず祖母を抱きしめてしまいました」。

叔母はその場で祖母を叱責しました。怖い事故にあっただけでなかったという安堵感と一緒に、叔母や私に心配をかけたことに対する言葉だったのだと思います。でも、あとで考えてみれば、一番不安で泣きたかったのは祖母自身。祖母はこうなりたくてなっているのではなく、どんな人間も母も私も弟もやがてはこうして歳をとっていくんだということを、祖母を通じていつしか自分に言い聞かせるように、見つめられるようになっていきました」。

「今年になってなにを食べてもむせ返すようになっていた祖母は、誤嚥性肺炎ごえんせいはいえんになって入院した病院で祖父のもとへと旅立ってしまいました。母や叔母と一緒に祖母の遺品の整理をしていたとき、あの日花屋さんと祖母と一緒に買った剣山を



祖母が大切なものをしまっていた木箱

の写真でした。幾重にも箱にしまっていて、そんなものを祖母はずっと大切にしていたんだ...と思いました」。

「祖母が昔生け花の先生をしていたことも実は初めて聞きました。生け花のことなど私には皆目わかりませんでした。生け花のことも外も気持ちよいく晴れた日曜日に、祖母の車いすを押して一緒に近くの花屋さんへ行きました。祖母が、迷いもせず選んだいくつかの花と花を挿す剣山を買いました。叔

形見にももらいました。介護施設の順番待ちも間にあわずあつという間のできごとでした。わずか1年に満たない時間でしたが、言葉としてではなく祖母は私に本当にかくさんの大切なことを教えてくれた、贈りものを残していつてくれた、と思っ

### 大切な視点

最近あまりに殺伐としたニュースが多く、気が重くなることもあります。

認知症という診断がつくと、その言葉の負のパワーの大きさに押しつぶされるように、本人も周囲も、ときには介護や医療を仕事とする人の中にも、「認知症の人」としかその人を見なくなってしまうことががちです。介護をする人、担当する人がみな忙しすぎる...という理由もあると思

この手紙をくださった裕香さんは、そのような中でも、先入観を排除して、人として、身内の家族として認知症の祖母と触れあうことができたというとても素敵な経験をしたようです。

その時間を「贈りもの」と表現できた裕香さんをとてもらうやましく感じるとともに、私を含め多くの人が余裕なく、慌ただしく暮らしている毎日の中で、忘れてはならない大切な視点を教えてもらっているように思えてなりません。

「認知症を巡る『固定観念』という壁を超えて〜ハート・リング運動への投書から考える〜」を筆者が再構成し、加筆・修正したものです。

編集部注・第10回の記事は、本誌2016(平成28)年10月号(通巻795号)24〜25ページの連載「認知症にやさしい社会を考える〜本人、家族、医療、地域につながるために」の第6回